

小報もがみ

第18号



オバネの若き宮司が見る最上町

ずっと最上町の中のことを発信してきた小報もがみだが、今回は少しだけ最上町を飛び出しつつ、最上町との関わりが深い人物にお話を聞いた。

山刀伐峠を超え、尾花沢に抜けて3つ目の集落・矢越。その山裾に佇む山神社の若きイケメン宮司、横澤孝博さん（31歳）は、家庭の事情で、小・中学校の青春時代を最上町で過ごした。その後尾花沢に戻り北村山高校に進学するも、家から学校までの10キロの道のりを自転車で通うのに嫌気がさし（それだけではないだろうが）半年たたずに中退し、東京へ向かう。4年間多忙な企業で身も心もすり減らしながら働き、都会の生活に疲弊してきたタイミングで、宮司をしていた祖父から「具合悪いから神主してける」と連絡が来て、戻ることを決心した。山形市の護国神社で6年間の修行を終え、実際に尾花沢に戻ったのは3年前。小さな神社の宮司はそれだけで生活していくことは難しく、定年退職後に就くことが多い。横澤さんは異例の若さで宮司となったため、今後の事業を模索しながらも、現在は花屋で配達の仕事をしている。

なかなか波乱万丈な人生を歩んでいるが、その人生に深く影響を与えたのが富沢小学校時代の校長である五十嵐隆一先生との出会いだという。もともとお墓や石碑が大好きというちょっと変わった子供だったそうだが、民俗学や歴史に詳しい五十嵐校長との出会いから、最上町の郷土史や民俗に興味を持つようになる。私が小報もがみ2号で「もがみのおまじない」を調べていた時に、小・中学校時代の研究資料をまとめた「横澤ファイル」を貸してくれたことがあり、とても楽しそうに説明してくれたのが印象的だった。

富山馬頭観音の境内や、山や川が遊び場だった。「昔は三十三観音めぐりのおばあちゃんたちが大型バスで何台も来ていた時代で、子供に施しをすると観音様に施したのと同じになるというのでお菓子もらえなかったんです。お菓子もらいを期待しつつ遊んでいました（笑）」。

そして高校を中退する際、五十嵐先生からこう言われたという。「辞めたら辞めたでいいけども、行った先のことをまず調べなさい。それがフィールドワークだ。そして何にでも興味を持ちなさい。サラッとでも

調べることでその土地の良さが分かるから」。その言葉があって今があるのだと懐かしげに教えてくれた。今でも花の配達をしながらキョロキョロしていると、一日10個くらい気になることを見つめる。それがひらめきに繋がることもあるという。

最近では、久しぶりに神室連峰の雪形（※）を見れたのだと嬉しそうに話してくれた。「富沢小の6年生教室から見る神室連峰が本当に綺麗で。あそこが一番綺麗に見えるんじゃないかな。閉校してもその時期だけ開放してもいいかもしれないですね」。住んでいるとなかなか気づかないが、身近なところに魅力は潜んでいて、外から見たらとても面白いものだったりする。最上町を一度離れたからこそ見えてくるものもあったそうだ。

現在横澤さんは尾花沢に欠かせない重要な人物になっている。2年前に立ち上げた徳良湖畔で開催されるマルシェ「ドツキ市」の実行委員長も担っており、コロナ前は県内外から多くの集客を実現した。このイベントをきっかけに尾花沢市が徳良湖の価値を再認識し、様々な取り組みが計画されている。

視点を少しだけずらしてみる。それだけで、いつもの風景が魅力的で面白くなるんだと、横澤さんが少年時代に最上町で受け取ったバトンを、巡り巡って渡された気がした。

風景も、歴史も、人々も、違った角度から見れば、神室連峰の雪形のように新たな魅力が現れてくるかもしれない。

※かつて人々は山に残っている雪の消え具合から、農作物の種を蒔くタイミングを判断していたと言われていた。その残雪の形に名前を付けたのが雪形で、神室連峰には馬形や犬っこ雪など、複数の雪形が見られる。

2021年5月26日発行

編集：最上町地域おこし協力隊 山崎香菜子

情報提供や山崎とお話したい方はご連絡ください

電話0233-43-2261（最上町役場まちづくり推進室）

メールhayakawamiyage@gmail.com